

Tosando, Old Tosando and Iriyamatoge Ritual Site in Karuizawa, Nagano

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sakurai, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00057294

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



長野県軽井沢町の入山峠祭祀遺跡と古東山道、そして東山道

櫻井 秀雄

(長野県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

長野県北佐久郡軽井沢町と群馬県安中市松井田町の県境に所在する入山峠には古墳時代の祭祀遺跡が存在し、「入山峠祭祀遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されている(軽井沢町教委 2017・図1)。昭和44(1969)年には大場磐雄氏を調査団長とした国道18号碓氷バイパス建設に先立つ発掘調査が実施されており、峠で行われた神まつりの痕跡がわかる全国的にも珍しい峠祭祀の遺跡として広く知られる存在である(写真1~4)。

峠祭祀を考える上では欠かせない遺跡であり、また古東山道とも深い関連性が指摘されるなど、内包する資料のもつ重要性は極めて大きいものである。ただし、これまでの考察は昭和44年調査の結果のみに依拠しているきらいがある。そこで今回はこれまでの入山峠の祭祀遺跡の調査歴を振り返ることにより、改めて入山峠の祭祀遺跡について考え、古東山道及び東山道についても検討していきたい。

2 入山峠における祭祀遺跡の発見と調査歴

入山峠は、軽井沢町の南東の大字長倉字潜岩に所在する。碓氷峠から続く矢ヶ崎山の連なる山脈の鞍部に位置し、祭祀遺跡はこの入山峠の頂上付近の平坦部

の標高約1034mの場所にある(図2)。軽井沢側の軽井沢駅付近との比高差は約100mとなだらかなのに対し、群馬県側の安中市松井田町赤坂集落付近との比高差は約400mであり、群馬県側は急傾斜となっている。

(1) 山崎義男氏による遺跡の発見と調査

～昭和29(1954)・30(1955)年～

入山峠で本遺跡が発見されたのは、昭和29年のことである。昭和28(1953)年の朝鮮戦争休戦後、アメリカ軍は日米安保条約による日米行政協定により、浅間山麓・妙義山麓に山岳戦演習地を求め、旧坂本町(現安中市松井田町坂本)には山岳訓練学校の建設を計画した¹⁾。この山岳訓練学校建設に伴い入山峠を通過する道路改修が群馬県により行われることとなり、これに先立ち、昭和29年12月には現地踏査が行われた。本遺跡はこの現地踏査の際に、考古学研究者でもあった群馬県安中土木出張所長の山崎義男氏により発見されたのであった。道路改修工事は昭和30年に行われたが、その間の5月から9月にかけて山崎氏は、工事と並行して発掘調査を実施している。その際の調査成果は『考古学雑誌』43巻1号で紹介されているが、山崎氏による発掘は6地点(A・B・b・C・D・E)で行われた(山崎1957)。遺物の出土状況は以下のとおりである(図3)。



写真1 入山峠頂上付近の碓氷バイパス



写真2 入山峠頂上方面からみた碓氷バイパス



写真3 入山峠祭祀遺跡の馬頭観音



写真4 入山峠祭祀遺跡の現況
(左方向に馬頭観音がある)

A地点は地表の草木を除去すると径20~30cm程度の主として安山岩の角礫が「石塚の如く」積み重なっており、その下層には浅間山の噴火による黄色軽石層がみられた。なお、山崎氏は「石塚状角礫群」と呼称している。石製模造品や土器片等はその軽石層直下の黒色粘土層から出土した。また本地点直下の旧道に接した平場からは近世のキセル雁首が出土している。

b地点は約6×7mの範囲であり、白玉や坏類の微小破片を表採で得ることができた箇所であった。これは風通しがよい上に傾斜部となっているため、表土がほとんどなく遺物包含層が地表に露出していたからであると山崎氏は指摘する²⁾。

B地点はb地点を拡張したもので約3.5×5m四方の範囲である。

C地点は約2m平方の範囲であり、坏破片1点が出土した。現在も残る馬頭観音(文化15年建立・写真3・5)背部のD地点と前面のE地点には約1m四方のピットを入れたが遺物はまったく認められなかった。これらの調査結果と町道入山峠線道路改良工事の掘削状況から山崎氏は、祭祀遺跡として考えられる範囲はA・B地点を主体とした約20㎡程度の場所に限定されるとしている。

出土遺物には、玉類、石製模造品、土師器、内耳鍋、陶器、ガラス小玉、古銭、キセル雁首、磨製石斧、黒曜石片がある。玉類には管玉、勾玉、丸玉が、石製模造品には白玉、剣形品、円板、勾玉形品、刀子形品、鎌形品がみられる。個数については、丸玉1点、刀子形品1点(現存長4cm)の他は記載がないが、掲載写真でみると、他には、剣形品6点、円板4点、管玉3

点、勾玉形品1点、鎌形品?1点、ガラス小玉2点、白玉15点がみられる。これらの出土地点については不明である。土師器片は相当数出土し、器種では坏、高坏、埴、埴がみられているが、いずれも小破片であり、復元できるものはなかったという。このことから、「祭祀終了後、使用土器を故意に打ち砕いて小片として撒き捨てたのではないか」と山崎氏は論ずる。時期については5~6世紀頃とみている。また興味深いのは、手捏土器は小破片でもまったくみられなかったということである。中世では内耳鍋の把手が3点出土している。陶器の出土は少なく、蓋と坏がある。ガラス小玉はB地点から2点が出土した。古銭には皇宋通宝2枚、紹聖元宝1枚、永樂通宝1枚がA地点の「石塚」下部の黒色粘土層付近から出土しており、A地点下の旧道付近の地表面近くからは、寛永通宝1枚とキセル雁首1点が出土している。その他、磨製石斧1点がB地点の黒色粘土層下位から、黒曜石片・珪岩片3点がA地点から出土している。

(2) 『安中志』にみる入山峠

山崎氏は入山峠での祭祀遺跡の発見と調査の一方で、江戸時代に安中藩主の板倉勝明(即山・1809~1857年)が編纂した地誌『安中志』の記述にも注目した³⁾。

同書では入山村の項で、入山峠の馬頭観音についてとりあげており、「○(信濃國境村境) 観音堂、馬頭観音石像也(俗珠數石観音と云) 軽井澤の原へ出口也」とあり、「珠數観音」と呼ばれていたことがわかる。この後には、

「○管石、右の菩薩方實丈斗りも有へき地に建り其傍に砂の中をさかし求る折々出つ其色大形青砥の如くして◎如此輪に切たるか如しいと小きもあり又劍の形の如きも出る事あり矢の石といふものゝ如きか土人天工の物なりといへとも覺束なしかゝるもの多く古墳より出れば其類にや有けん上古には玉を以飾とせりしかはあれど此あたり古墳とも思はれざる也。」

との記述が続いている。「管石」は管玉とみて間違いなく、それも「大形青砥」とあることからグリーンタフ製の大型管玉であろう。また、「如此輪に切たるか如しいと小き」ものは白玉、「劍の形の如き」ものは劍形品を指しているとみていただろう。つまり馬頭観音の周囲には管玉や石製模造品の白玉・劍形品が散在していたことがよく理解できる記述である。さらに古墳でもないのにこうした玉類がみられることに不思議がる様子がかげえるのも鋭い視点である。こうした玉類や石製模造品が周辺にみられることからこの馬頭観音は「珠数石観音」と呼ばれることになったのであろう。

(3) 大場磐雄氏による現地踏査・調査

～昭和 30 (1955) 年～

祭祀考古学の第一人者である國學院大學教授の大場磐雄氏は昭和 30 年の春頃には、山崎義男氏により入山峠から多数の遺物が出土した旨の連絡を受けていたが、満を持して 10 月 1 日に現地踏査を実施した。この踏査には軽井沢に避暑中の三笠宮殿下も誘い、山崎氏や信濃史学会長の一志茂樹氏も同行している。当日は午後 4 時頃に入山峠へ登り、ごく小規模ではあるが頂上の一部を発掘し、劍形品や白玉等を発見している。他には縄文土器や石器類、宋銭や内耳鍋も出土したという (大場 1967)。

(4) 長野県教委による分布調査

～昭和 43 (1968) 年～

昭和 41 (1966) 年にはいと、入山峠祭祀遺跡を通過する国道 18 号碓氷バイパス建設の計画が浮上してきた。この計画が具体化してきた状況を受けて、長野県教育委員会では昭和 43 年に調査範囲を確定するための分布調査を実施することとなった⁴⁾。当初は群馬県教育委員会も参加する予定であったが急遽都合がつかなくなったことから、この分布調査は長野県教育委員会だけで 11 月 7・8 日に行われたという (長野県教委 1969・図 4)。調査は長野県教育委員会社会教育

課の神村透指導主事を調査担当者とし、長野県考古学会員の竹内恒氏、島山忠雄氏、渡辺重義氏、藤沢平治氏、笹澤浩氏、川上元氏、土屋長久氏らが調査員として参加している。長野県側の林道に 9 箇所を試掘ピット (A-I) を入れたが、C・D・H からは遺物はなく、E に多く集中しており、長野県側では B のみであったという。調査の結果、遺跡の大半は群馬県側にあり、30 × 40 m 程度の広がりであることを把握した。出土遺物には劍形品 10 点、無孔円板 1 点、双孔円板 5 点、白玉 4 点、勾玉形品 2 点、管玉 3 点が報告書に実測図が掲載されている (長野県教委 1969・図 5)。七曲り坂にのぞむ先端では土師器片 1 点も採集されている。なお、報告書には渡辺重義氏がゆるぎ岩付近で採集した古墳時代の土師器 (高坏、坏) の実測図も掲載されている (図 6)。この他にもこの時の調査では石製模造品の破片が少量と土師器片多数がみついている (長野県教委 1973)。

なお、前述した『安中志』の記述において玉類や石製模造品の出土が伺える馬頭観音付近では山崎氏の調査でも遺物の出土がなかったが、今回も遺物は確認されていない。

(5) 国道 18 号碓氷バイパス建設に先立つ発掘調査

～昭和 44 (1969) 年～

上記の分布調査を踏まえた国道 18 号碓氷バイパス建設に先立つ緊急発掘調査は、軽井沢町教育委員会が調査団を組織して、昭和 44 年 9 月 27 ～ 10 月 15 日に実施した。顧問は一志茂樹氏 (当時長野県文化財審議委員、信濃史学会長)、調査団長に大場磐雄國學院大學教授、副団長に相山林繼國學院大學助手 (現在同大名誉教授) が務め、調査員・調査協力者は國學院大學大場研究室の院生・学部生と地元考古学研究者で構成されている。國學院大學大場研究室関係者では小山修三氏 (当時国際キリスト教大学副手、現在国立民族博物館名誉教授) の他、金子裕之氏 (当時國學院大學大学院生、元奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長、元奈良女子大学教授) をはじめとする院生・学部生が、地元研究者からは桐原健氏 (当時諏訪実業高校教諭、元長野県考古学会長)、竹内恒氏 (元佐久考古学会長)、土屋長久氏 (元軽井沢町歴史民俗資料館学芸員)、渡辺重義氏 (元佐久考古学会員) が、それぞれ参加している。

発掘調査は、約 20 × 20 m の調査区範囲に 2 m 平方

のグリッド107箇所余を設定し、掘り下げている(図7)。調査成果は以下のとおりである。

検出された遺構はなかった。出土遺物には、古墳時代の土師器片(埴・高坏・壺・S字状台付甕など)約2000点、玉類では管玉22点、勾玉5点、水晶霽玉1点、

ガラス小玉2点、石製模造品では勾玉形品5点・白玉273点・双孔円板25点(うち破片5)・単孔円板15点・無孔円板2点・剣型品約170点・刀子形模造品1点、未製品約85点、鉄製品では刀子1点・鍬先状小破片1点、その他に黒曜石製の石鏃1点がみられている(図

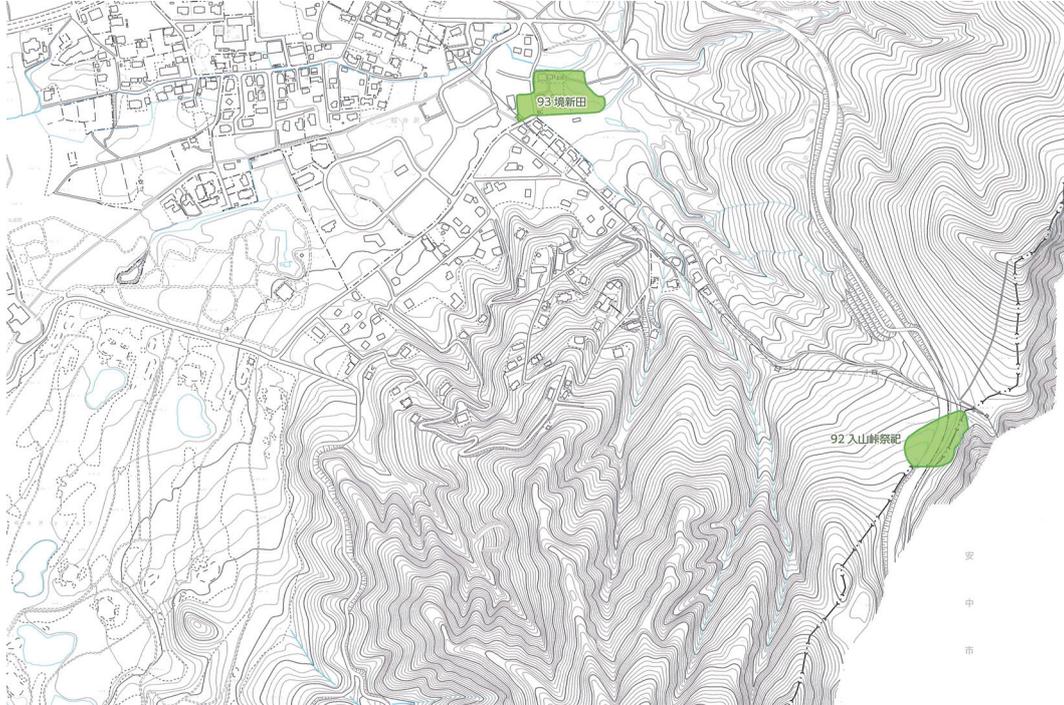


図1 入山峠祭祀遺跡の位置と範囲

(軽井沢町教委 2017 より)

※境新田遺跡は、古墳時代後期の遺跡として登録されている。

※松井田町は2006年に安中市と合併し、現在は安中市松井田町となっている。軽井沢駅と横川駅の間は現在は廃線。

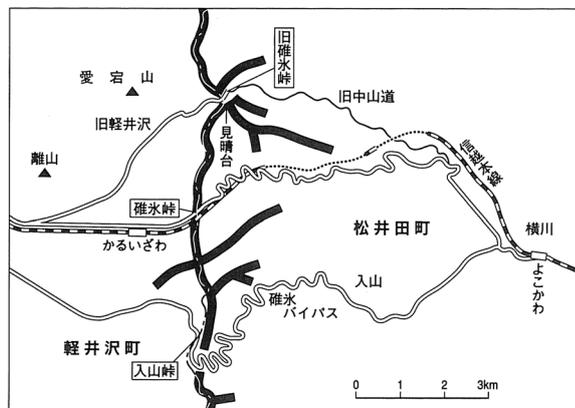
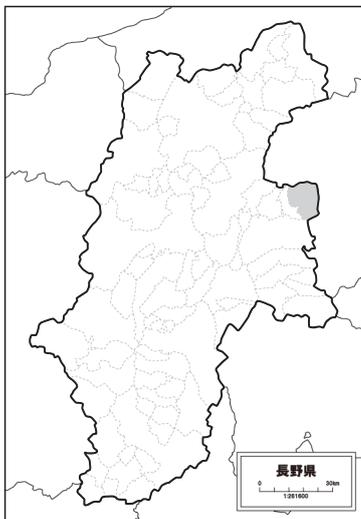


図2 軽井沢町の位置(左)と入山峠・旧碓氷峠・碓氷峠の位置(井出・市川1994より)

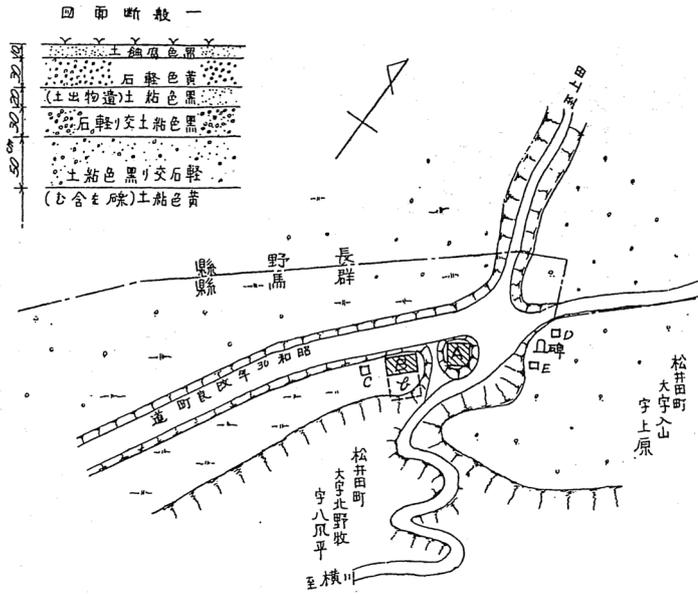


図3 昭和30年調査の調査地点 (山崎 1957)



写真5 馬頭観音
(図中の『碑』がこれにあたる)

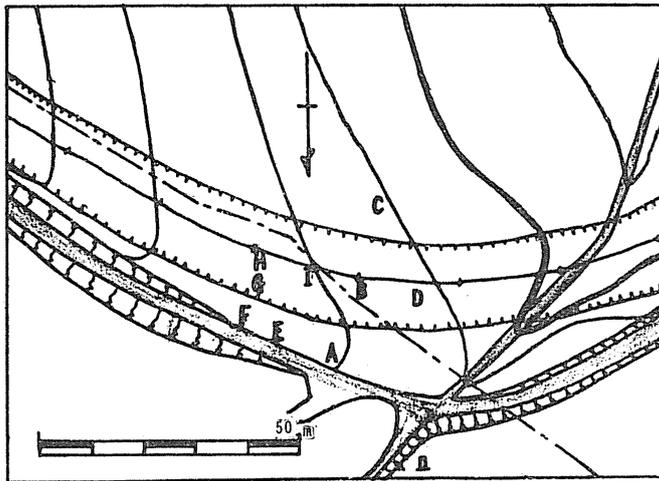


図4 昭和43年調査の調査地点 (長野県教委 1969)

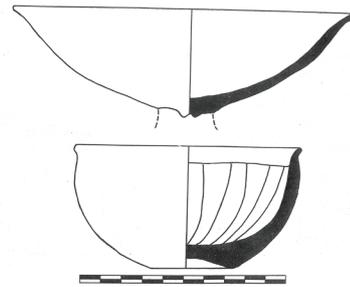


図6 渡辺重義氏採集土器
(長野県教委 1969)

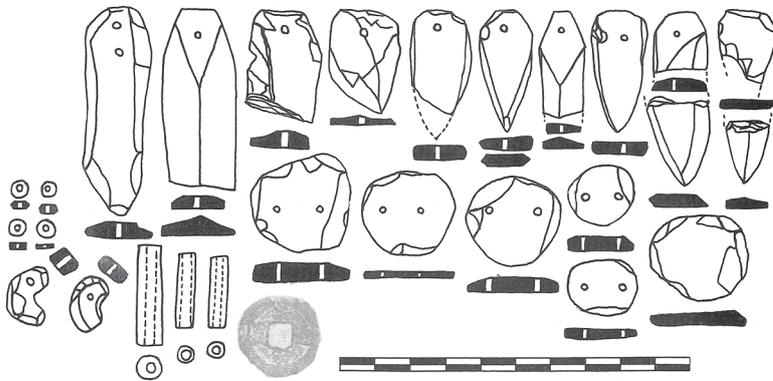


図5
昭和43年調査
出土遺物
(長野県教委 1969)

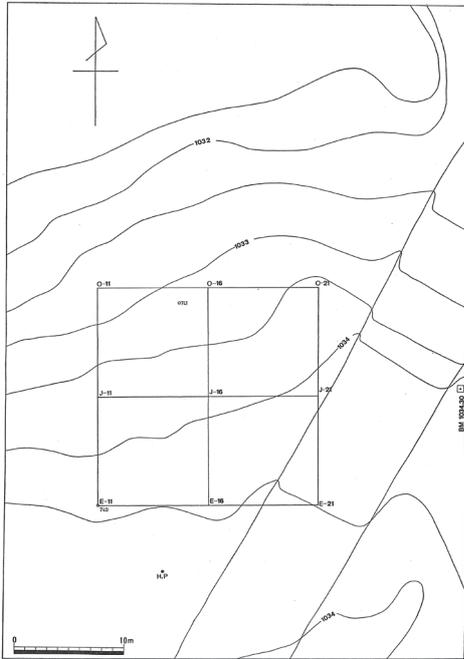


図7 昭和44年調査の調査区

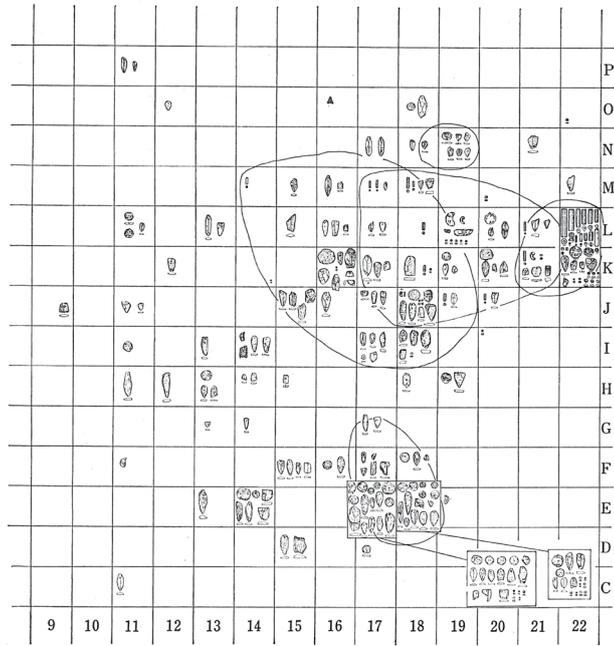
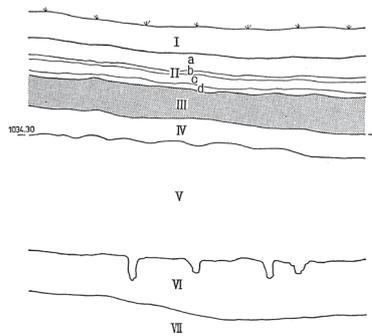


図8 昭和44年調査の遺物出土状況図



土層注記

- I 表土
- IIa 褐色軽石層
- IIb 軽石砂層
- IIc 黄褐色軽石層
- IId 軽石砂層
- III 軽石混じり黒色腐食粘土層=遺物包含層
- IV・V 軽石混じり黒褐色土層
- VII 黄褐色軽石層

図9 昭和44年調査の土層図(E14区北壁)

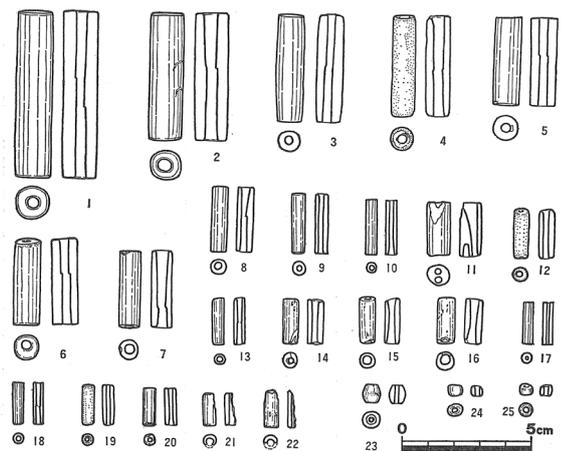


図10 昭和44年調査の出土遺物

(管玉・ガラス玉・水晶玉)

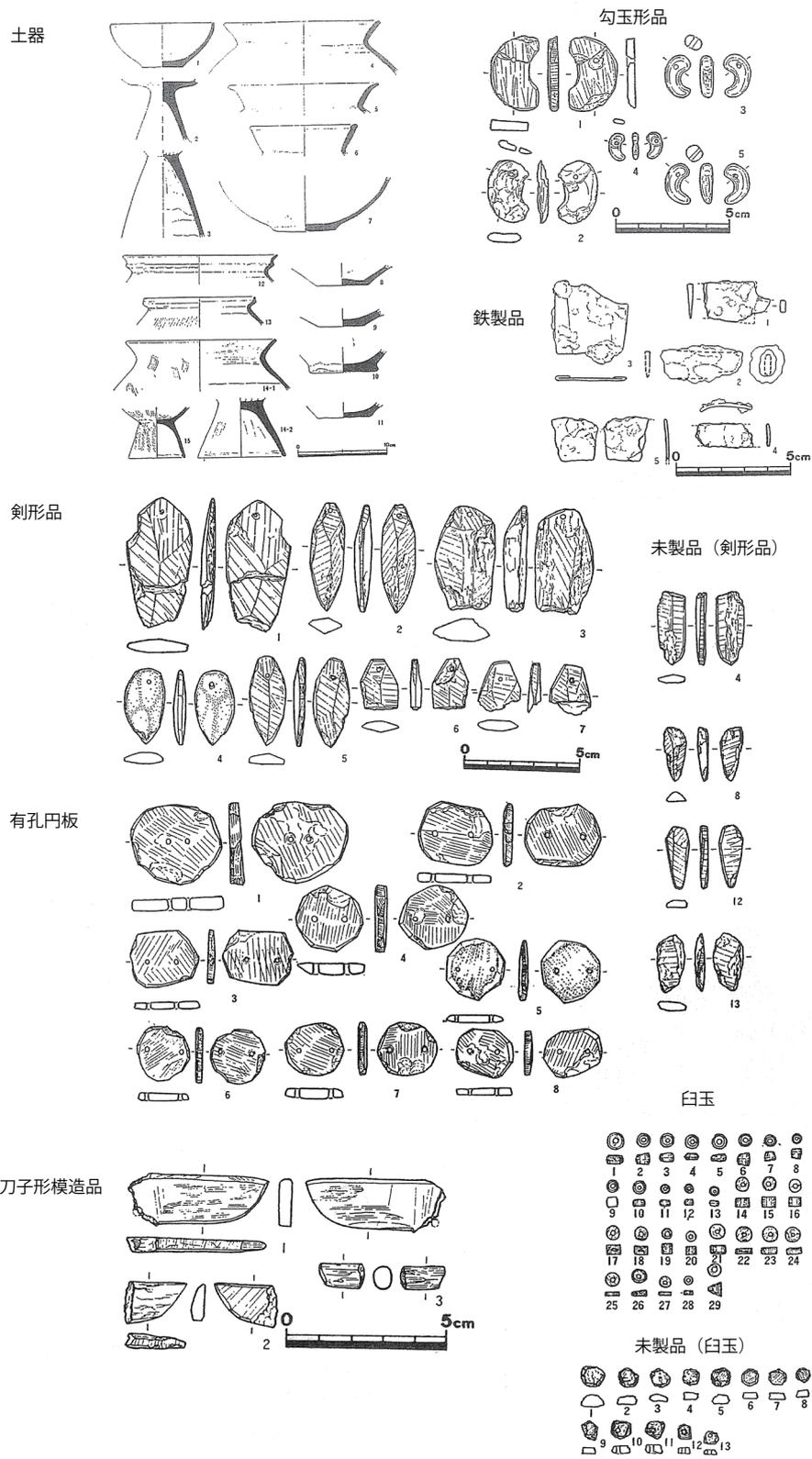


図 11 昭和 44 年調査の出土遺物 (土器・石製模造品)

10・11)。

107箇所のグリッドのうち14箇所では遺物が全く出土しなかったが、残りのグリッドからは1点～146点までと出土量に多寡がある。このうち遺物が特に集中するのは、E17・E18区を中心とする地区(約10×16m)と、L22区の一帯を中心としてK21・L21区等を含む地区(4×4m)に集中はみられ、2つの中心核があることが明らかとなっている(図8)。

なお、昭和43年分布調査との調査区の対比は、昭和43年のA地点が今回のL21区に、BはN14区、CはP8区、DはS15区、EはG19区、FはD17ku、GはE14区、HはG11区の一部に相当する。

この他にも東京電力鉄塔改良工事に伴う発掘調査が松井田町教育委員会により行われたほか、電電公社の工事などで遺物が採集されていたとのことである(福島2005・軽井沢町教委1983)。

3 入山峠にみる峠祭祀の様相

(1) 土層

昭和30年の調査での土層は、上層より、①黒色腐植土(10cm)、②黄色軽石(30cm)、③黒色粘土(遺物出土:20cm)、④黒色粘土交り軽石(30cm)、⑤軽石交り黒色粘土(50cm)、⑥黄色粘土(礫を含む)となっている(図3)。

昭和44年調査の土層は、Ⅰ～Ⅶ層に分けられており、Ⅰ層が表土である(図9)。Ⅱ層は厚さ約20cmの軽石層で、浅間山起源の噴出軽石層とみられる。さらにⅡa～d層に細分される。Ⅱa層は褐色軽石層で軽石には土がついていた。Ⅱb層は軽石砂層で小石が混入する厚さ1～2cmの細砂層。Ⅱc層は黄褐色軽石層で小石は混入するが他の混入土はない。Ⅱd層は軽石砂層で薄い青灰色細砂層が表面を覆っている。Ⅲ層は軽石混じり黒色腐食粘土層であり本層が遺物包含層となる。厚さ20～30cmで遺物は上半に多いという。Ⅳ・Ⅴ層は軽石混り黒褐色土層、Ⅶ層は黄褐色軽石層、Ⅷ層は黄褐色土層であり、Ⅳ層以下からの遺物の出土はない。いずれも土層にほぼ相違はなく、①=Ⅰ、②=Ⅱ、③=Ⅲ、④=Ⅳ・Ⅴ、⑤=Ⅶ・Ⅷに対比できよう。遺物が出土する土層は軽石層直下にあたるが、この軽石層は浅間山起源の降下軽石である。浅間山の降下軽石は大きく分けて浅間A～浅間Dがあり、浅間A軽石層は天明3年(1783)の大噴火、浅間B軽石層は

天仁元年(1108)の大噴火、浅間C軽石層は古墳時代前期の4世紀中頃、浅間D軽石層は約4,500年前の縄文時代中期に比定されている(堤2004)。後述するようにⅢ層から古墳時代中期の遺物が出土していることからすれば、浅間C軽石層に比定するのは難しく、Ⅱ層は浅間B軽石層及び浅間A軽石層が含まれているとみてよいだろう。

(2) 出土品の時期

① 発掘調査による資料から

昭和30年調査では古墳時代の土器の他、中世の内耳鍋片・古銭が出土しているとの報告があり、昭和43年調査の報告書では古墳時代中期の土器が図化されているが、詳細なところは不明である。

そのため、昭和44年調査の資料が発掘資料の基礎をなしているが、この時の調査で出土した土器についてはすべて土師器である。上限はS字状口縁台付甕がみられることから4世紀代には遡ることがわかり、下限は5世紀中葉頃までとみてよいだろう。このように昭和44年調査での出土土器は古墳時代に限られ、これが古代以降の土器類の出土を見る神坂峠との大きな相違であると報告書では指摘されている。

② 群馬県立歴史博物館所蔵の山崎義男氏寄贈資料

ところで、群馬県立歴史博物館には山崎義男氏の入山峠祭祀遺跡資料が保管されており、令和元(2019)年7月に実見・資料調査することができた。山崎氏の資料は3箱あり、石製模造品では剣形品37点、円板18点(双孔12、単孔1、有孔1)、勾玉2点、刀子形3点、白玉33点、その他1点、破片65点、滑石片17点が、玉類では管玉8点がみられている。この他には、土師器片337点(古墳時代333、古代4)、古代の須恵器片11点、弥生土器片40点、中近世土器片26点、中近世銅銭5点、近世の寛永通宝33点、近世のキセル雁首1点がある。特筆したいのは、土器類のなかに古代の土師器、須恵器類がみられたことである。このなかには昭和30年調査で得た資料も少なからず含まれているとみられる。実際、昭和33年調査の報文掲載の遺物写真と同一のものとみてとれる遺物もある。また、國學院大学のデジタルミュージアムの大場磐雄博士写真資料には、昭和30年撮影の入山峠資料の写真があるが、これにも山崎氏資料が多く含まれていることがわかる⁵⁾。

これらと報文掲載写真等との照合を進めることによ

り昭和30年調査及び踏査時の採集遺物の同定ができると思われる。今後の課題としたい。

こうした群馬県立歴史博物館所蔵の山崎義男氏寄贈資料には、当然ながら踏査などでの採集資料が主体であるため、資料としての価値は二次的とはなるが、入山峠祭祀遺跡の貴重な資料であることは間違いない。私は、これらは積極的に調査・研究に利用すべき資料であると考えている。

③ 佐久市立望月歴史民俗資料館所蔵の渡辺重義氏寄託資料

入山峠祭祀遺跡の出土資料は佐久市立望月歴史民俗資料館でも展示されている。これは地元研究者であった渡辺重義氏の採集資料の寄託品である。展示資料は、石製模造品21点（剣形品9点、有孔円板7点、勾玉形品2点、白玉3点）と管玉3点、それに土師器坏1点である。参考資料として取り上げておきたい。寄託品は展示資料以外にもあり、これについては改めて検討していくことにしたいと思っているので今回は展示資料を紹介することとどめたい。なお、展示されている土師器坏は長野県教育委員会の1969年刊行文献に掲載されているものとみてよさそうである。

4 長野県内に残る峠祭祀の遺跡

(1) 神坂峠（阿智村）～標高1570m～

入山峠と対比されるのが、長野県阿智村と岐阜県中津川市の県境に所在する神坂峠である（写真6）。神坂峠に祭祀遺跡が存在することは、鳥居龍蔵氏が大正10（1921）年に行った踏査・調査により判明した（鳥居1921）。その後、昭和20年代には下伊那郡誌編纂会が鳥居龍蔵氏の調査資料や地元に残る採集資料の再調査などを大場磐雄氏の指導の下で行っている。昭和40年代にはいり長野県教育委員会は、高速道路建



写真6 神坂峠

設や鉄道建設をはじめとする大規模開発への保護対応として遺跡の存否を確認するための分布調査を県内各地で開始するようになったが、神坂峠についても分布調査が昭和42年（1967）に実施され、遺跡の広がりや祭祀遺跡としての重要性が明確となった。（市澤2008）。こうした分布調査を踏まえて、阿智村教育委員会は昭和43（1968）年に大場磐雄氏を調査団長とした本格的な学術発掘調査を実施した（阿智村教委1969）。その結果は以下のとおりである。

検出遺構には石畳状の遺構と土坑がみられた。出土遺物には土器、玉類、鏡、石製模造品、鉄製品等がある。土器では土師器（S字状口縁台付土器3個体分・碗）、須恵器（坏・甕・壺・ハソウ）、緑釉陶器、灰釉陶器が、玉類では管玉21点、棗玉1点（他に未製品1）、ガラス小玉29点、石製小玉3点、鏡では獣首鏡片1点、石製模造品では剣形品310点（未製品・破片含）・鏡形模造品1点、双孔円板40点（他に小破片27）、単孔円板9点（他に破片4）、無孔円板3点（他に小破片31）、勾玉形品4点（他に破片19・未製品4）、白玉863点（他に破片31・未製品9）・刀子形模造品3点（他に破片12・未製品1）、斧形模造品1点、馬形模造品2点が、鉄製品では鉄鏃2点、鉄斧1点、刀子3点、やりがんな3点が、それぞれ出土している。なお、神坂峠祭祀遺跡は昭和56（1981）年に国史跡に指定されている。

(2) 雨境峠（立科町）～標高1580m～

雨境峠は諏訪から佐久へ抜ける峠であり、北佐久郡立科町に所在し、古墳時代に比定される5遺跡（鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石）と中世の積石塚である4遺跡（法印塚・中与惣塚・与惣塚・賽の河原）からなる遺跡群が存在する（雨境峠祭祀遺跡群）。昭和4（1929）年に藤森栄一氏が石製模造品を採集していたといい、八幡一郎氏が昭和9（1934）年に刊行した『北佐久郡の考古学調査』には「祭祀場址」の項目のなかに雨境峠における記載があり、すでにこの段階には峠祭祀にかかわる遺跡であることが認識されていたことがわかる（桐原1967、八幡1934）。八幡氏の踏査は昭和6・7（1931・1932）年であるが、大場磐雄氏も昭和8（1933）年10月に踏査を行っている（大場1943）。大場氏は、鳴石遺跡には「鳴石」と呼ばれる鏡餅状に重なった2個の巨石と周囲に築かれた方形の集石遺構が存在し、勾玉原遺跡とともにかつては多

量の石製模造品が採集できたといい、「この地がもと草原であった当時は、草刈人が一日に数十箇を拾うことは珍しくなく、携行したワッパ（弁当入れ）一杯もあったと伝えている」（大場 1967）。

昭和 41（1966）年には桐原健氏による踏査が行われ、平成 5～6（1993～1994）年には立科町教育委員会が発掘調査を実施している。桐原健氏の数回に及ぶ踏査は、新産都市等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査の一環として実施したものであり、踏査とともに既出遺物の再確認も行っている。児玉司農武氏採集品が白玉 27 点・剣形品破片 1 点・有孔円板 1 点、藤田貢氏採集品は白玉 43 点・剣形品 1 点・有孔円板 2 点・管玉 2 点・勾玉 1 点、山浦勘左エ門氏採集品が白玉 42 点・剣形品 9 点・有孔円板 1 点であり、土器・土製品は発見されなかったということである。桐原氏は、鍵引石遺跡・勾玉原遺跡・鳴石遺跡からは石製模造品が出土しており、勾玉原遺跡の現存資料に代表させると白玉・剣形品・有孔円板が主体をなし、これに管玉・勾玉が加わっていると指摘する。桐原氏はこれらの祭祀遺跡を古墳時代という範疇で比定しており、細分はしていない。なお、既出資料も含めて石製模造品の出土例は意外と少なく、桐原氏は「どうもメンバー杯の採集はいささか誇張された話のようである」と大場氏の記述に疑問を呈している（桐原 1967）。

立科町教育委員会による発掘調査は小林幹男氏を調査団長として鳴石遺跡・鍵引石遺跡・勾玉原遺跡・法印塚・中与塚・与塚の範囲確認調査等を実施した（立科町教委 1995）。発掘調査により発見された遺物には、鳴石遺跡で剣形品 1 点と土師器片 2 点の他、近世の銭貨や黒曜石片が、勾玉原遺跡では須恵器片 6 点と黒曜石片 1 点が、それぞれ出土したにすぎなかった。また、報告書ではこれらの出土品に加えて既出遺物の

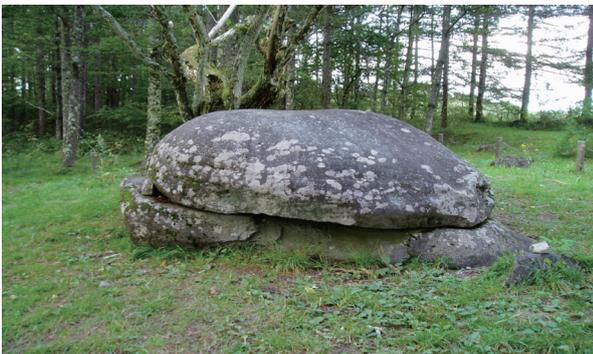


写真 7 雨境峠の鳴石

整理・図化も行っている。鳴石遺跡では剣形品 2 点・有孔円板 1 点・白玉 3 点・須恵器 3 点・土師器 1 点・古銭 4 点が、勾玉原遺跡では剣形品 9 点・有孔円板 1 点・白玉 25 点・須恵器 6 点・土師器多数が、赤沼平遺跡では剣形品 2 点・有孔円板 1 点・勾玉 1 点・須恵器 1 点・土師器 3 点が、鳴石原遺跡では剣形品 1 点・有孔円板 2 点・勾玉 2 点・白玉 74 点・管玉 4 点が、鍵引石遺跡では剣形品 3 点・有孔円板 4 点・白玉 20 点・土師器数点が、それぞれみられている。須恵器・土師器は 6～7 世紀初頭頃に比定されるものが主体であり、雨境峠祭祀遺跡群の年代は、6 世紀が上限であるとする。なお、白樺湖畔の池ノ平遺跡では剣形品 2 点・有孔円板 1 点・須恵器 3 点・土師器 6 点・古銭等がみられ、土師器には 8 世紀以降のものが含まれているという。また、この発掘調査で注目したいのは、鳴石について、2 個の巨石を鏡餅状に重ねて築いた人工的遺構であるとの指摘である。祭祀を行う場所を意図的に選定したことになり、峠祭祀にとどまらず、古墳時代の祭祀において重要な知見である（写真 7）。

5 佐久市望月の瓜生坂祭祀遺跡について

佐久市望月の中山道沿いに瓜生坂と呼ばれる低い鞍部がある。この瓜生坂を見下ろすような南側尾根筋の山懐の開墾地からはかつて石製模造品などが採集されていた。これらの出土遺物は昭和 42（1967）年に藤沢平治氏（前佐久考古学会長）が調査を行い、白玉 70 点と手捏土器 5 点、それに伴出したとされる土師器 3 点を資料紹介し、瓜生坂祭祀遺跡として知られるようになった（藤沢 1967）。白玉は 6 世紀後半から 7 世紀前半に特徴的な粗製で大型品である。ただし、この瓜生坂祭祀遺跡を峠祭祀とみるかは議論がある。福島邦男氏は「瓜生坂祭祀遺跡出土の遺物は、一時期ないし一回の祭祀によって存在した様子を示しており、長期に渡る手向けの状態ではないとの見解もあるところから、峠の祭祀とは異なるのではないかという考え方も出されている。出土地点には目安となる巨石等も存在しておらず、また、地形的にも比較的傾斜がきつい所であり、さらに、地理的条件からみて近くて通りやすい道を想定した場合、別の道筋も想定できることから、発掘調査を含め再考が必要と思われる。」と指摘している（福島 2005）。私はこれまでこの瓜生坂祭祀遺跡も峠祭祀の一例として考えてきた（櫻井 2002・

2005・2007・2017・2018)。しかしながら、瓜生坂祭祀遺跡の立地は本来の瓜生坂から離れた場所にあり、そしてその場所が尾根鞍部の峠や坂ではなく山懐にあって峠越えの場所でないことから、現在は峠祭祀とは異なるものと考えに至っている。そのため、今後は瓜生坂祭祀遺跡については峠祭祀の事例からははずして考えていきたい。

6 峠祭祀と古東山道

大場磐雄氏は、峠祭祀の行われた神坂峠—雨境峠—瓜生坂—入山峠を結ぶ古墳時代のルートを律令期に整備された東山道の前身にあたるものにとらえて「古東山道」と命名し、大和政権の東国経営に重要な意義を持つ軍事的性格が強い幹線道路であると論じた（大場1970）。古東山道は、その道路跡が発掘調査で判明したものでなく、文献からその存在が知られるものでもない。あくまでも峠祭祀の遺跡を結んだ推定ルートなのである。しかしながら、私はこうした峠祭祀の遺跡を結ぶルートが古墳時代の重要な幹線道路であったとする見解には賛同したい。また、前項で瓜生坂祭祀遺跡については峠祭祀の遺跡からははずして考えるべきことを示したが、推定ルートとして瓜生坂を通過したことには異論はない。そして、白樺湖畔の池ノ平御座岩遺跡（茅野市・県史跡）からも石製模造品が出土していることから、諏訪を経由する古東山道は、松本・上田を通過する東山道と推定ルートに大きな違いがあることが推測できる（図12・13・14）。

なお、古墳時代の道路跡の発掘事例が奈良県御所市の鴨神遺跡などごくわずかにすぎないため、古東山道の実像は明確ではないが、高島英之氏が指摘するように、古墳時代の道路は、「もともとあった踏み分け道的な自然発生的道路をベースに造成され」、「幅約三メートル前後であり、また直線的なルートはあまりとらず、後の律令制下に造営された七道駅路とは大きく異なる形状であった」という理解が妥当であると考え（高島2016）。

ところで、古墳時代に峠祭祀の痕跡が認められるのは全国的に見ても神坂峠、雨境峠、入山峠のみである。他に遺物の出土が報告されている峠に静岡県と神奈川県境の足柄峠があるが、古墳時代にまではさかのぼらないと言ってよいであろう。鳥居龍蔵氏は大正12（1923）年に武蔵野会の一行とともに踏査した際

に、山頂の聖天祠の傍から陶器類を発見し、直良信夫氏は足柄峠越えの古道付近から墨書土器を伴う石圍遺構が発見したという（大場1943）。他にも足柄峠周辺では土器が出土していることは坂詰秀一氏が指摘している。しかしながら、これらはいずれも9世紀以降のもののみられる（坂詰1984）。また、鳥居龍蔵氏は足柄峠の頂上で木葉痕のある土器の底部を採集したといわれるが詳細は不明である。したがって、足柄峠では古墳時代の峠祭祀を行った確実な痕跡は認められていないのである。古墳時代の峠祭祀は、信濃（科野）国の古東山道に限って行われたものと考えてよいと私はみている。

7 東山道は入山峠を通ったのか？

古東山道は北佐久郡立科町の雨境峠から佐久地域へは入り、入山峠へ向かう。この間の推定ルートについては改めて考察していきたいと考えているが、小諸市御影新田から御代田町小田井周辺から軽井沢町へ進み、軽井沢町内では古墳時代前期の県遺跡から境新田遺跡を経て入山峠へ向かうものとみている。

一方、令制の東山道は、『延喜式』により佐久郡には清水駅と長倉駅が存在したことが知られる。清水駅は小諸市西部の諸地籍に推定地があり、信濃国分寺のある上田方面から進んできたことがわかる。長倉駅については、御代田町小田井周辺に置く説と軽井沢町に置く追分説と沓掛説があるが、考古学的知見からは小田井周辺に比定することが妥当である（図12）。その理由には、軽井沢町の追分・沓掛は標高1000m前後という高所にあたり水田稲作の標高限界を超えてしまうこと、周辺には奈良時代の集落跡も見当たらないため駅田・駅戸の確保が難しいこと、御代田町小田井には鋳師屋遺跡群という奈良時代の大集落跡があり、馬骨が30頭以上もみついていること、小田井近接の小諸市御影新田には駅家もしくは駅倉とも考えられる遺構や東山道の可能性が高い幅約9m前後の2本の溝が発見された宮ノ反A遺跡群が存在すること、があげられる（櫻井2017）。

その長倉駅から上野国へのルートがどうであったかについては、大きく2つの説が唱えられている。古東山道から引き続き、①入山峠を越えたとの説と、②入山峠から北へ約5.5km北にある近世の五街道のひとつである旧碓氷峠を越えたとする説である（図2）。

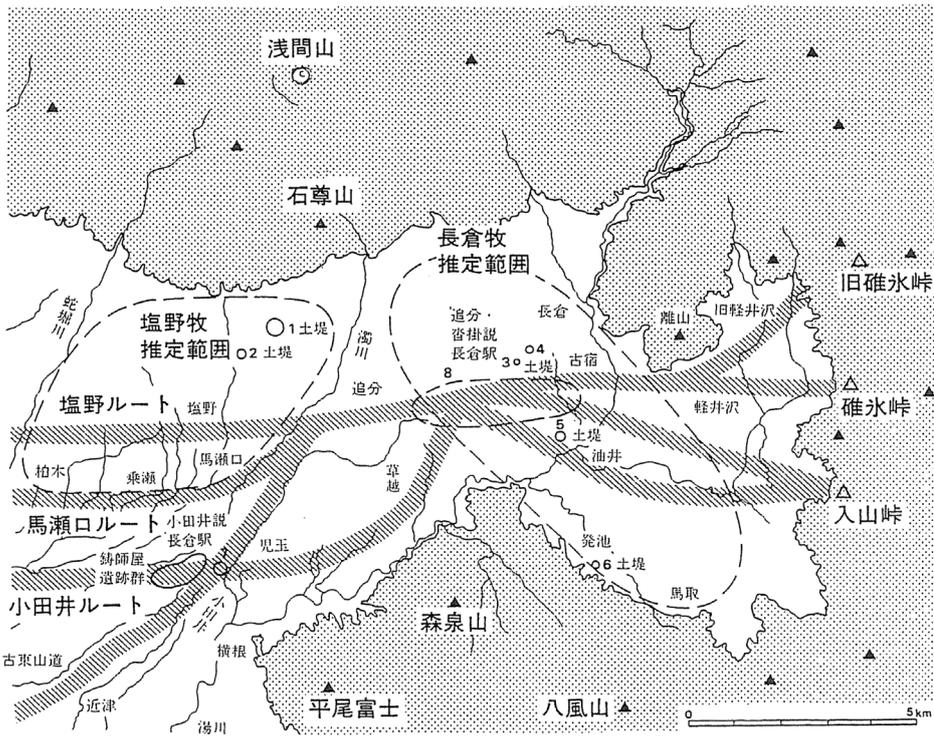


図 12 佐久地域の古東山道・東山道の推定ルート (御代田町教委 1998)

※斜線部は標高 1000m以上

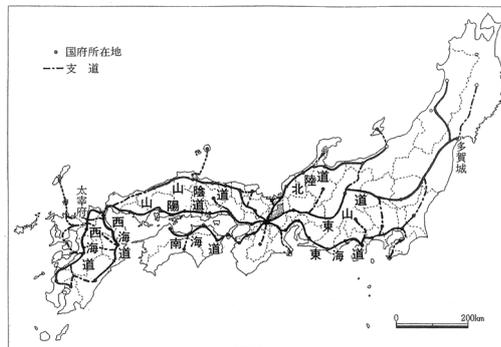
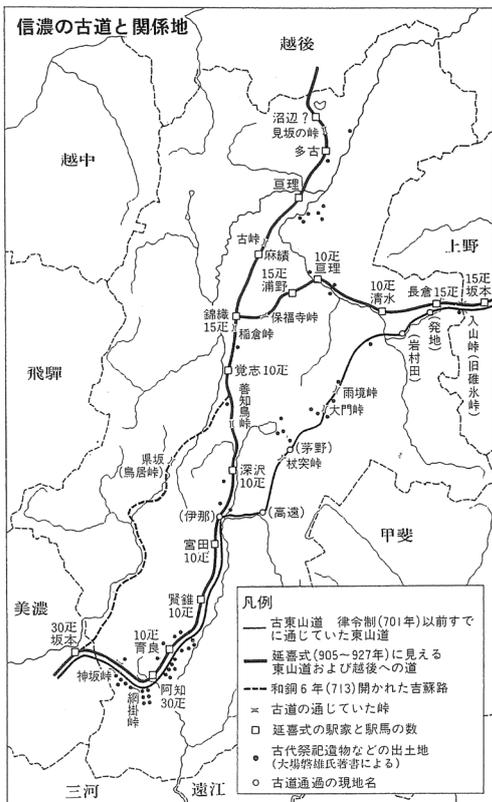


図 13 古代の七官道 (御代田町教委 1998)

図 14 信濃の古道と関係地 (古川他 1988)

①の入山峠越え説を強く否定するのは木下良氏である。「入山峠の発掘調査の結果では、奈良・平安時代の遺物は全く出土していないので、律令期の官道が通じていたとは考えられない。」と論じている（木下2009）。旧碓氷峠越え説をとる論では、木下氏と同じく、入山峠祭祀遺跡では昭和44年調査で奈良・平安時代の遺物が出土していないことを最大の根拠としている。

②の旧碓氷峠越え説については、黒坂周平氏が旧碓氷峠頂上の熊野皇太神社には正応5年（1292）の銘のある鐘が残っていることや正安3年（1301）の『宴曲抄』にみえる道筋が、旧碓氷峠を通ったと考えられることなどから、少なくとも鎌倉時代には利用されていた古道であることは確実であると指摘する（黒坂1989・1992）。しかしながら、これ以前にさかのぼる証拠はないことも確かである。群馬県教育委員会の『歴史の道報告書 東山道』では熊野皇太神社は熊野信仰の伝播年代から考えても古代末期より前には遡れないことなどからも旧碓氷峠越えのルートは武士団成立の古代末期からとみるのが妥当であると論じている（群馬県教委1983）。

ここで私が注目したいのは、先にも取り上げた群馬県立歴史博物館の山崎義男氏寄贈資料である。山崎義男氏が入山峠で採集した資料であるが、これには石製模造品や古墳時代の土器の他、奈良・平安時代、中近世の遺物もみられている。採集資料であるため二次的な参考資料ではあるが、先にも述べたように私はこの山崎氏採集資料は重要な知見を提供してくれるものと積極的に評価したい。この山崎氏の採集資料を含めれば、木下良氏が奈良・平安時代の遺物が入山峠では皆無であるとした入山峠越え説を否定する根拠は崩れることとなるとともに、古代末期以前にさかのぼる証拠が認められない旧碓氷峠越え説ではなく、入山峠越え説の可能性が大きく高まる資料となろう。

また、黒坂周平氏は東山道がどちらを通過したかは、「いまだ明快な答えがでていない」とするが、東山道で信濃国から上野国へ向かう最後の駅となる長倉駅の所在がこの問題をにぎるとし、長倉駅を軽井沢町中軽井沢に比定する沓掛説であれば旧碓氷峠越えとなり、御代田町の小田井に比定する小田井説であれば入山峠越えとなる傾向が強いと論じ、入山峠越えをとる説では、東山道は中世になって旧碓氷峠を通ったものとす

る（黒坂1989・1992）。前述したように、考古学的知見からは長倉駅を小田井周辺に置く説で異論はみられないため、この点からも令制東山道は入山峠を越えたルートである論拠になると私は考えている。

8 峠祭祀の様相

(1) 古代神と祭祀

古代日本の神観念については以前に論じたことがあったが、以下の3つの特徴が指摘できると考えている（櫻井2018）。

①古代日本の神は、目に見えない存在で、人里には常在せず、人里離れた山奥や海の彼方の他、峠や道、川といった境界にいると考えられていた。そして、神まつりを行う際に招き寄せられるものである。

②古代日本の神は、自然と一体化した存在（自然神）であり、しかも「崇る神」であった。

③人間と自然は対立するものであり、自然災害や疫病を含む自然の脅威は神の仕業と考えられていた。

そして、『風土記』にみられる「夜刀の神」の説話にみられるように崇る神（自然神）に対して、慰撫し、とりなし、喜ばせて、崇りを鎮めようとするのが祭祀（神まつり）を行う最大の目的であったのである。詳細は別稿を参照してもらいたい。古代日本の神は一般的に理解されているような温厚な神ではなく、崇りを引き起こす恐ろしい自然神であったことを押さえておきたい（櫻井2018）。

(2) 峠神

前述したように、神は人里には常在せず、人里離れた山奥や海の彼方の他、峠や道、川といった境界にいると考えられていた。つまり、峠には神が坐していたのである。

国文学者の池田弥三郎氏は「万葉びとにとっては、陰難の場所とは、自然の状況が危険であるよりも先に、まず、怖い神がいる所であった」といい、「万葉びとの生活では、海道のとつとつ、とくに境をなす、坂や峠や海峡などの、怖い神がいた」と考えられており、「坂にいる神が御坂であり、その場所が御坂」であり、「そういうところにいる神は、通過する旅びとの、大事なものを要求するのである」と峠神の怖さを指摘する（池田1978）。

また、大場磐雄氏も「手向の神は峠にいます神であり、峠は道ゆく人の手向する所であったから、手向が

峠となったといわれている。平安時代にはそれほど恐ろしい神の姿をしめしていないが、さかのぼって奈良時代以前になると、峠の神はいずれも荒ぶる悪神とされ、道ゆく人を悩ましたのであった。」と述べ、峠神が恐ろしい存在であったと論じている（大場 1967）。こうした恐ろしい峠神を慰撫し、安全に通行できるようにするために峠祭祀は行われたのである。

（3）「手向けの幣」と石製模造品

～石製模造品は「手向けの幣」ではない！～

峠神に対して「手向けの幣」を奉獻することは、奈良時代以降の『万葉集』や『古今和歌集』によって知られる。『万葉集』には「佐保過ぎて奈良の手向に置く幣は妹を目離れず相見しめとそ」（300）、「周防なる磐国山を越えむ日は手向けよくせよ荒しその道」（567）、「ちはやぶる神のみ坂に幣奉り斎ふ命は母父がため」（4402）など多くの歌に詠まれている。

そして、古墳時代にはこの「手向けの幣」が石製模造品であったと大場磐雄氏が提唱して以来、「石製模造品＝手向けの幣」との見解が一般的となっている（大場 1943）。しかしながら、私はこの見解に疑念を抱き、石製模造品は手向けの幣でないことを論じたことがあり、現在でもその考えに変わりはない（櫻井 2002）。詳細は当該論文（櫻井 2002）によるが、ここで私見の要約を記してみる。

私が「石製模造品＝手向けの幣」説に疑念を抱いた点は、①石製模造品はあくまでも祭祀具であり、神への奉獻物ではないこと。②仮に石製模造品が幣だとすれば、『万葉集』・『古今和歌集』等にみられる「手向けの幣」が布類や糸類あるいは紙などであったのに対して、「石」→「布・糸・紙類」というかなりの材質の隔絶がみられ、連続性がないこと。の2点であった。

そして、「足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも」（4447）や「日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ」（3420）のような『万葉集』袖振歌や民俗学にみる袖もぎ習俗の考察から手向けにおいては、かつては衣服（着物）あるいはその一部を捧げる行為が存在したことがわかり、手向けのものは「着物→袖→布→布のきれはし・糸・紙類」へと変遷していったと指摘したのであった。この観点から私は、石製模造品と手向けの幣は全く別のものであると考えている。

一方の入山峠にみる峠祭祀では、煮炊きの痕跡が著

しいS字状口縁台付甕片が確認できる。これは、峠において調理が行われたことを示すものである。また壺や高坏、壺も入山峠からは出土している。古墳時代の祭祀については復元案を提示したことがあるが、祭祀には調理済食物の奉獻が欠かせないため祭祀遺跡では煮炊きに用いた煮沸用土器や供献用土器の出土があることを指摘している（櫻井 1996・図 15）。また、峠祭祀においても管玉やガラス玉といった装身具の出土がみられる。これらの装身具は祭祀を執り行う人物が身に付けていたものであり、他の祭祀遺跡と共通する。特に入山峠では大型な管玉が多数出土していることは特記できる。このように峠祭祀もこうした他の祭祀遺跡でのありかたと同様であり、同じ祭祀形態をもったものであることが理解できるであろう。そして石製模造品はあくまでも祭祀具なのであり、幣とは全く別のものであることも強調しておきたい。

また、このような煮炊きを伴う祭祀を峠で行うには相当な手間がかかるわけであり、個人あるいは少人数で行うことは考えにくく、やはりそれなりの規模を有する集団により執り行われたと理解するべきであろう。大場磐雄氏は神坂峠—雨境峠—入山峠を結ぶ古東

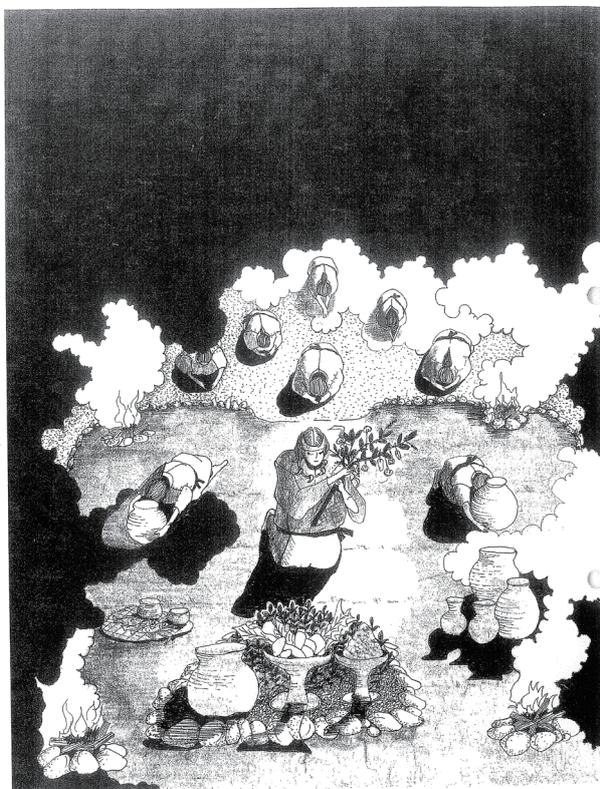


図 15 石製模造品を用いた祭祀儀礼復元図
（櫻井 1996 より）

山道ルートは大和政権の東国経営に重要な意義をもった軍事的ルートであることを論じているが、私も大場氏の論に賛意を示したい（大場 1970）。また、昭和 44 年調査では石製模造品の未製品が多数出土しており、昭和 30 年調査でも未製品を含んだ石屑が多数出土したという。群馬県立歴史博物館の山崎氏寄贈資料にも滑石片が認められている。こうした未製品や滑石片の出土から私は入山峠で石製模造品を製作したものと理解している。このように石製模造品の製作が現地で行われたことも相当規模の集団、それも大和政権の東国進出に伴う軍事集団によるものと捉えている。

このように、峠祭祀においては着物（衣服）を奉獻することが大切な祭祀行為であり、これに加えて入山峠、雨境峠、神坂峠では食物の調理を含む祭祀行為が行われていたと考えたい。これに対して他の峠では幣の前身である着物（衣服）を奉獻することとどまっていたのであろう。それが『万葉集』などにみる手向けの幣へと変遷していったのではなかろうか。古墳時代の峠祭祀遺跡がこれまでにとりあげてきた入山峠、雨境峠、神坂峠に限られることの説明にもなるだろう。

そして、『万葉集』などに詠まれる「手向けの幣」は、着物を奉獻した段階から布・糸・紙類からなる幣へと変遷していった峠祭祀の最終形といってもよいと考えるものである。先に引用した「平安時代にはそれほど恐ろしい神の姿をしめしていないが、さかのぼって奈良時代以前になると、峠の神はいずれも荒ぶる悪神とされ、道ゆく人を悩ましたのであった。」との大場馨

雄氏の論もこのような変遷過程を示すものといえよう（大場 1967）。

（4）峠祭祀における剣形品の多出

峠祭祀の遺跡では、石製模造品のうち剣形品の出土割合が他の集落遺跡と比べて大きく、剣形品は峠祭祀に特徴的なものあることは市澤英利氏と中里信之氏により指摘されている（市澤・中里 2016）。両氏によれば、剣形品の割合は阿智村以外の飯田市ほかの 37 遺跡では 1%、松本市高宮遺跡で 0.2%であるのに対し、神坂峠およびその東西麓の遺跡では 21.3%及び 38.8%と剣形品が突出していることがわかる。両氏は入山峠についても検討しており、34.7%であることを明らかにしている。この検討は昭和 44 年調査分のみであるため、今回は本稿でとりあげてきた既出資料で数量のわかるものも含めて検討してみたい。

群馬県立歴史博物館所蔵の山崎義男氏寄贈資料には昭和 30 年調査分も含まれているとみられるため、昭和 30 年度分は集計からは除いて、合計数量を出してみると、剣形品 233 点、円板 73 点、勾玉形 16 点（玉類としての勾玉との区別が不明なものもあるためここでは一括した）、刀子形 4、白玉 313 点の 632 点であり、これに未製品と破片を加えると 800 点となる。このうち未製品・破片を除いて剣形品の割合を算出してみると、約 37%である⁹⁾。

なお、私はある程度の数が必要な白玉は別にした方がよいと考えるため、白玉を除いた 326 点での割合を出してみると、約 71%という高率を占める。入山峠

表 1 入山峠出土の石製模造品と玉類一覧

調査・資料	石製模造品								管玉	ガラス玉	丸玉	備考
	剣形品	円板	勾玉	刀子	白玉	未製品	破片他	計				
昭和 43 年（長野県教委）	10	6	2	—	4	—	少	22	3	—		
昭和 44 年（軽井沢町教委）	170	42	10	1	273	85	—	581	22	2		
群馬県立歴史博物館（山崎寄贈資料）	37	18	2	3	33	17	66	176	8	—		昭和 30 年調査との重複あり
佐久市望月歴史民俗資料館（渡辺寄託資料）	9	7	2	—	3	—	—	21	—	—		展示資料
計	226	73	16	4	313	102	66	800	33	2		総計 835
注	※勾玉は玉類としてのものと模造品としての勾玉形があるが、本表では一括した。 ※昭和 44 年調査分は剣形品・未製品は報告書では約〇点との表記である。											

でも剣形品の出土割合がかなり高いことが改めて理解できよう(表1)。

ところで、峠祭祀においてなぜ剣形品の出土割合が高いのか、それを紐解くひとつの視点として、『古事記』・『日本書紀』にみられるヤマトタケルの東征説話に峠と剣形品の関係を考えるヒントがあると私は考えている。ヤマトタケルは東征の最後に荒ぶる峠神と伊吹山の神と対決する。『古事記』では足柄峠で峠神を倒すが、『日本書紀』では上野国と信濃国の境にある「碓日坂」を経て、「科野坂」で峠神を倒して尾張国へ向かう。「碓日坂」では亡き妻の弟橘媛を偲んで「吾妻はや」と3回嘆いたことから東国を「吾妻国」と呼ぶようになったという⁷⁾。『古事記』と『日本書紀』では部分的に差異があるが、峠神に対しては祭祀で言向けたり、武力で制圧している。その後、ヤマトタケルは伊吹山に進む。ところがここでは剣を持たずに伊吹山の神に素手で戦いを挑んで敗れてしまう。峠神に対しては勝利するのに対して、伊吹山の神には剣を持たなかったことで敗北してしまう。これはこの説話が生み出された頃には、峠神はすでに祭祀で抑えることができていることを反映したものであると私は考えている(櫻井2018)。またこのことは峠神や山神には剣の霊力が有効であることも示しているとの理解できるのではなからうか。東国では剣形品の割合が高いことは、こうした峠神や山神に対する剣の霊力に期待したからであるというのが私の見解である。

一方、伊吹山の神には敗北したことは、山は神そのものであって神々が住むところであるため、人間はみだりに山へ入ってはならないものという観念がヤマトタケル説話のできた段階にはあったことを示すのではなからうか。古墳時代には山麓あるいは山麓にある山麓祭祀であり、これが山へは入り山頂祭祀が行われるようになるのは奈良時代以降のことであった。伊吹山については、役小角や白山を開山した泰澄、三修上人などがこの山に分け入ったと伝えられており、やはり奈良時代にはいつから山を修業の場とした僧が山中へ入るようになったことが知られる。

(5) 手捏土器・ミニチュア土器の欠如

ところで、他の祭祀遺跡で出土することが多い手捏土器及びミニチュア土器が、入山峠はもとより神坂峠や雨境峠の峠祭祀遺跡においては認められない⁸⁾。また桐原健氏は土製鏡や土製勾玉の出土もないことを

指摘する(桐原1991)。こうした手捏土器や土製鏡・土製勾玉という土製品の欠如は峠祭祀を考える上で極めて重要な視点である。長野県内の他の祭祀遺跡で見ると、長野市駒沢新町遺跡1号祭祀址では手捏土器26点が、松本市高宮遺跡1号土器集中区ではミニチュア土器61点・土製鏡1点・土製勾玉1点が確認されている(笹澤1982・松本市教委1994)。今回はこうした出土のありかたの相違を提示するに留め、詳細は今後の検討課題としたいが、祭具の違いが祭祀の目的や内容と関連していたことが予想され、峠祭祀の実態解明に迫りうる大きな観点になると考えている。

9 中世以降の入山峠

中世には、旧碓氷峠越えの道が主要道となって後の中山道に続いていくことになるが、群馬県立歴史博物館の山崎義男寄贈資料には内耳鍋片や古銭もみられることから入山峠も引き続き利用されていたことがわかる。

近世には、中山道の脇道として入山峠越えのルートが利用され、入山道と呼ばれていた。入山道は、約2km南方の和美峠道とともに中馬が行きかう道として、米、大豆、砂糖、茶、魚等の食料品や太物、煙草、紙、薬等の日用雑貨などの商荷輸送で大いに賑わった。これは継ぎ送りを避けることその他、碓氷峠と比べて道筋が楽であったことも要因であったという(木内1979)。前述したように現在も入山峠には文化15年(1818年)建立の馬頭観音がみられている。

明治2年に碓氷関所が廃止されると、険しい旧碓氷峠を避けて入山峠を越える人が急に増加したという(菊池1981)。一方、長野県の七道開削事業の第一路線として新碓氷峠の開削が明治16年に着手・翌年に開通し、馬車が通れるような現在の国道18号にあたる新道となった(市川2004)。現在の碓氷峠はこれにあたる。そして、入山峠には国道18号の交通量増大等を踏まえてバイパス建設が計画され、前述した昭和44年の発掘調査を経て、現在は国道18号碓氷バイパスが通過している。当初は日本道路公団の有料道路であったが、平成13年(2001年)からは無料通行となっている。いみじくもかつて近世で旧碓氷峠越えの中山道の脇道であったのと同じく、現在は上信越自動車道の脇道として利用されていると言ってもよいかもしれない。

10 おわりに

以上、入山峠祭祀遺跡について過去の調査歴や採集資料も含めた出土品の検討を行い、入山峠が古墳時代のみではなく、すでに縄文時代には人間が足を踏み入れた痕跡があり、弥生土器も少なからず認められていたこと、さらには古代～近世、そして近現代に至るまで利用されてきたことをみてきた。特に山崎氏採集資料には古代の土器類も含まれていることから、古東山道はもとより、令制の東山道も入山峠越えのルートであった可能性が高いことを指摘した。

入山峠祭祀遺跡は、保存を前提とした発掘調査が行われた神坂峠祭祀遺跡や雨境峠祭祀遺跡群とは異なり、バイパス建設に先立つ緊急発掘調査であったことから失われた部分もある。しかしながら、峠祭祀の行われた遺跡として貴重な知見を与えてくれる重要な遺跡であり、さらには古東山道及び東山道の実態を解明していく上にも欠かせない遺跡である。今後もこれまでに得られた資料をさらに検討し、入山峠を通して峠祭祀、そして古東山道・東山道を追求していきたいと思っている。

本稿を草するきっかけとなったのは「入山峠の祭祀遺跡と古東山道」と題した軽井沢町追分宿郷土館教養講座（令和元年8月11日）の依頼を受けたことにある。峠祭祀にはかねてより関心があり、私見を発表してきたこともあるが、改めて入山峠について考える契機となった（櫻井2002・2005, 2007・2017・2018）。

軽井沢町追分宿郷土館をはじめ、軽井沢町教育委員会の皆様には前述の講座の他にも資料調査や現地調査等でも多大なご協力をいただきました。また、群馬県立歴史博物館の飯田浩光氏には資料実見に際してご配慮いただきました。記して感謝申し上げます。

また、最後となりますが高浜秀先生の古希をお祝い申し上げます。高浜先生御着任の前に私は卒業していたため、直接講義を受ける機会はありませんでしたが、考古学大会などでは様々なご教示・ご指導をいただいております。また、考古学研究室卒業生の柳生俊樹さん・麻美さんご夫妻の結婚式でも同席させていただいたことも楽しい思い出です。益々のご活躍とご健勝をご祈念いたします。

註

- 1) アメリカ軍の計画は、妙義山で山岳冬季訓練学校の山岳戦術訓練をして浅間山の1400 m以上の地域約5,000町歩で総仕上げを行い、山岳訓練学校は生徒400名、教官（将校）

125名が交替で5月から11月まで毎週4日間、無期限に訓練を行うというものであったという（長野県1973）。浅間山についても妙義山についても、演習地計画へはそれぞれ地元から強い反対運動がおこり、最終的にアメリカ軍はこの計画を断念することとなった。浅間山については昭和28年3月に計画が発表されるが、長野県をあげての二百万県民の浅間山演習地化反対闘争を経て昭和28年7月16日に計画取り消しとなった（古川他1988）。また、妙義山については反対運動があったものの、山岳訓練学校建設と演習地化は昭和28年10月に閣議決定され、昭和29年には土地の接取もはじまった。ようやく昭和30年2月に接収が解除されたが、道路改修工事等は行われることとなった。

- 2) 山崎1953報告のP24では「B」地点とあるが、P25の「b」地点と「B」地点の説明箇所から判断するにP24の「B」地点は「b」地点の誤記であると判断した。
- 3) 『安中志』の引用は、国立国会図書館デジタルコレクションの『校正安中志』（中島芳太郎出版、明治31年（1898））による。
<http://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/763828>
- 4) 昭和43年9月には電電公社の工事により遺跡が掘り起こされているとの新聞報道があり、文化庁（亀井正道文化財調査官）・群馬・長野両県等の関係者による協議もなされている（長野県教委1969）。
- 5) 國學院大學デジタルミュージアムの大場雄博士写真資料・相山林継博士収蔵写真資料は以下のURLで閲覧することができる。
<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/?jsessionid=AAA22CE3D8ACC21186C095D44E4C667A>
- 6) なお、長野県教育委員会刊行の『埋蔵文化財発掘調査要覧』では、「昭和30年 山崎、大場調査」とあり、剣形品7点、円板4点、白玉12点、刀子2点、勾玉1点、管玉3点、石製模造品破片小數、ガラス小玉2点、土器片多數、古銭4点、陶器片少數との記載があるが、昭和30年に行われた山崎氏調査分なのか、山崎氏も同行した大場氏踏査・調査分も含まれているのか、どの調査を指すものか不明である（長野県教委1973）。
- 7) 一志茂樹氏は昭和30年調査の結果を踏まえつつ文献史料の再検討を行い、原初の「碓氷坂」はそれまで当然とされてきた旧碓氷峠ではなく、入山峠であることがほぼ確実になると論じている（一志1958）。
- 8) 今回は手捏土器とミニチュア土器は区別しないでおき、報告書の記載通りとする。

引用参考文献

- 阿智村教育委員会1969『神坂峠』
荒井輝允2014『青年が軽井沢を守った—浅間山米軍演習地反対闘争1953—』ウインかもがわ
池田弥三郎1978「万葉びとの一生」講談社現代新書
井出孫六・市川健夫1994「碓氷峠・入山峠」『定本 信州百峠』郷土出版社

- 市川健夫 2004 『信州学大全』 信濃毎日新聞社
- 市澤英利 2008 『東山道の峠の祭祀 神坂峠』 新泉社
- 市澤英利・中里信之 2016 「古代における神坂峠の境界・境界性
『東国古代遺跡研究会第6回研究大会資料 古代の峠・関そ
して境界』
- 一志茂樹 1958 「古代碓氷坂考」『信濃』10巻10号、信濃史学
会
- 大場磐雄 1943 「峠神の一考察」『神道考古学論攷』
- 大場磐雄 1967 「まつり」 学生社
- 大場磐雄 1970 「古東山道の考古学的考察」『國學院大學大学院
紀要』第一集
- 尾見智志 2008 「発掘された道路状遺構」『佐久考古通信』
No101、佐久考古学会
- かみつけの里博物館 2017 『第26回特別展図録 小さなもの
のがたり 石製模造品からみる群馬の古墳時代』
- 軽井沢町教育委員会 1983 『入山峠』
- 軽井沢町編 2000 『改訂新版 軽井沢文学散歩』 軽井沢町観光協
会
- 軽井沢散歩の会 2002 『軽井沢散歩』 山川出版社
- 軽井沢町教育委員会 2017 『軽井沢町遺跡詳細分布調査報告書』
- 神崎宣武 2019 『社をもたない神々』 角川選書
- 木内 寛 1979 「入山峠」『日本歴史地名大系第20巻 長野県の
地名』 平凡社
- 菊池清人 1981 『佐久の交通史』 株式会社櫛
- 木下良 2009 『事典 日本古代の道と駅』 吉川弘文館
- 桐原健 1967 「長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査」
『信濃』19巻6号、信濃史学会
- 桐原健 1982 「雨境峠遺跡群」『長野県史 考古資料編 主要遺
跡(北・東信)』 長野県史刊行会
- 桐原健 1991 「道と峠の神まつり」『古墳時代の研究 3巻』 雄
山閣
- 桐原健 1994 「入山峠」『信州の大遺跡』 郷土出版社
- 久保浩美 2005 「第十三章 長倉駅家から坂本駅家へ」『信濃の
東山道』 長野県文化財保護協会
- 黒坂周平 1989 「第三章第五節 東山道」『長野県史通史編第一
巻 原子古代』 長野県史刊行会
- 黒坂周平 1992 『東山道の実証的研究』 吉川弘文館
- 黒坂周平・古川貞雄編 1991 『定本 信州の街道』 郷土出版社
- 群馬県教育委員会 1983 『歴史の道調査報告書 東山道』
- 小諸市誌編纂委員会 2003 『小諸市誌 近・現代篇』
- 坂詰秀一 1984 「足柄のみ坂」『万葉集の考古学』 筑摩書房
- 櫻井秀雄 1996 「石製模造品を用いる祭祀儀礼の復元試案—松本
市高宮遺跡をモデルとして—」『長野県考古学
会誌』79号、長野県考古学会
- 櫻井秀雄 2002 「峠祭祀と石製模造品」『信濃』54巻8
号、信濃史学会
- 櫻井秀雄 2005 「峠祭祀雑感」『金大考古』51号、金沢大学考古
学研究室
- 櫻井秀雄 2007 「古代科野の神まつり」『信濃国の考古学』 雄山
閣
- 櫻井秀雄 2017 「信濃国の道後 佐久郡」『古代の坂と塚』 高志
書院
- 櫻井秀雄 2018 「古代日本の自然観—自然と人間のかかわりの歴
史」『信濃』70巻2号、信濃史学会
- 笹澤浩 1982 「駒沢新町遺跡」『長野県史考古資料編 主要遺跡
(北・東信)』
- 梶山林継 1972 「神坂峠」『神道考古学講座第5巻』 雄山閣
- 梶山林継 1982 「入山峠」『長野県史 考古資料編 主要遺跡(北・
東信)』 長野県史刊行会
- 梶山林継 2002 「峠の祭祀—神坂—」『平成14年 國學院大學学
術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する
基礎的研究」事業報告』
[http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/?jsessionid=AAA22CE3D8AC
C21186C095D44E4C667A](http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/?jsessionid=AAA22CE3D8AC
C21186C095D44E4C667A)
- 諏訪市教育委員会 1991 『有賀峠積石塚』
- 高島英之 2016 「古墳時代の道路」『日本古代の交通・交流・情報3』
吉川弘文館
- 高橋陽一 2009 「浅間山南麓の東山道を歩く」『佐久考古通信』
No102、佐久考古学会
- 田中広明 2009 「信濃の道後、坂東の道—小諸市宮ノ反A遺
跡の可能性」『佐久考古通信』No102、佐久考古学会
- 瀧音能之 2019 「4 荒ぶる神」『風土記と古代の神々』 平凡社
- 立科町教育委員会 1995 『雨境峠—祭祀遺跡と古道』
- 堤 隆 2004 『浅間大焼』 浅間縄文ミュージアム
- 鳥居龍蔵 1921 『有史以前の跡を尋ねて』 雄山閣
- 長野県 1973 『長野県政史 第三巻』
- 長野県教育委員会 1969 『国鉄等複線化等開発地域埋蔵文化財緊
急分布調査報告書—昭和43年度—』
- 長野県教育委員会 1973 『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧その2
(昭和41年度～昭和46年度)』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『県遺跡ほか』
- 西山克己 2019 「科野の馬・信濃の馬と考古資料から東山道を考
える」『古代交通研究会第20回大会資料集 馬がつなぐ古
代社会』
- 橋本雅之 2013 『『風土記』研究の最前線』 新人物往来社
- 橋本雅之 2016 「第三章「風土記」の世界 二 地上の神の世界」
『風土記 日本人の感覚を読む』 KADOKAWA
- 久松潜一 1965 『万葉集入門』 講談社現代新書
- 福島邦男 2005 「第一篇 古東山道 第三章 池の平から入山峠
へ」 長野県文化財保護協会 『信濃の東山道』、信毎書籍印刷
株式会社
- 藤沢平治 1967 「中山道瓜生坂祭祀遺跡」『信濃』19巻4号、
信濃史学会
- 古川貞雄他 1988 『図説 長野県の歴史』 河出書房新社
- 松本市教育委員会 1994 『高宮遺跡』
- 三浦祐之 2016 『風土記の世界』 岩波書店
- 水澤邦嵩・水澤光男 1999 「東山道と旧碓氷峠(一)」『街道の歴
史と文化—付 東山道と旧碓氷峠—』 軽井沢上代文化研究

- 会、初出は東信史学会『千曲』第 86 号
- 水澤邦薔・佐藤瑞枝・水澤光男・土屋長久 1999 「東山道と旧碓氷峠（二）」『街道の歴史と文化―付 東山道と旧碓氷峠―』
- 軽井沢上代文化研究会、初出は東信史学会『千曲』第 93 号
- 御代田町教育委員会 1998 『御代田町誌 歴史編上』
- 山崎義男 1957 「上信国境「入山峠」祭祀遺跡に就いて―附官道「東山道」碓氷峠の検討」『考古学雑誌』43 卷 1 号
- 渡辺重義 1990 『古代のかるいざわ』（私家版）
- 渡辺重義 1967 『軽井沢物語 第 1 集 ずゝ石峠』（私家版）
- 渡辺重義・森嶋稔・森山公一 1979 「北佐久郡軽井沢町遺跡の調査」『長野県考古学会誌』第 34 号